

LONGSTAY

住んでこそ、心が繋がるロングステイ

2014
Spring

特集
スポーツ&エトセトラ



一般財団法人ロングステイ財団
「Long Stay」はロングステイ財団の登録商標です



アバンチュールにご用心 ～性感染症の予防について～

太融寺町谷口医院 院長 谷口 恒

突然始まるロマンスもある、というのは事実ですが、そのときめきが思いもしなかった悲劇を、それも今後の人生を大きく狂わせてしまう悲劇をもたらすことがあるのもまた事実です。現地の食べ物、気候、慣習などの対策は充分におこなっていても、ときに落とし穴になってしまうことがあるのが現地でのロマンスが原因の「性感染症」です。

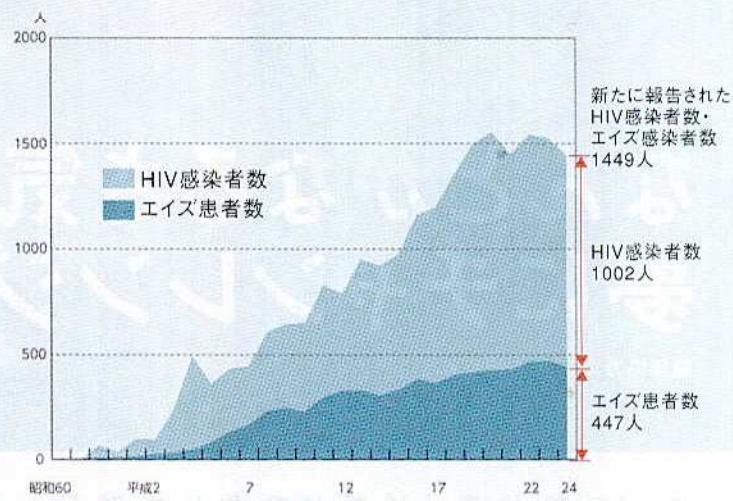
ある土曜日の診察終了間際の19時40分頃、私が院長をつとめる太融寺町谷口医院（以下「谷口医院」）にひとりの男性患者さんが苦しそうな表情を浮かべてやって来ました。10日以上前から発熱と倦怠感に苦しめられ、体中に皮疹が生じ、近くの病院で抗生素を処方されたけれども一向に改善しない、というのがその患者さんの訴えです。

発熱十皮疹、というのは医師からすると、ときに診断が困難であり多くの鑑別疾患を考えなければなりません。薬疹、麻疹（はしか）、風疹、Gibert薔薇色粋糠疹、…、いろいろな鑑別疾患を考えるなかで、私はひとつことを尋ねてみました。「最近、海外旅行に行きましたか？」その患者さんの答えは「そういえば1カ月ほど前にベトナムに出張で行きましたが…」。「そのときに何か出来事はありませんでしたか？」「いえ、特に何も…」。「ではもう少し具体的に聞きます。現地での性的接觸はありませんでしたか？」という質問の直後、患者さんの表情が変わるので私は見逃しませんでした。しばらく間を置いた後で患者さんはこのように言いました。「実は、現地の女性とちょっとしたことが…」

私は、性的接觸からしばらくして発熱と皮疹が生じた場合、少なくとも急性B型肝炎、梅毒、HIVなどは考えなければならないことを伝え、同意を得た上でこれらの検査をおこないました。結果は「急性HIV感染症」。この患者さんはベトナムで現地女性からHIVに感染し、帰国後に発熱と皮疹が生じたのです。

谷口医院には海外で感染症に罹患したという患者さんは少なくなく、多くは呼吸器感染や消化器感染ですが、この症例のように過去数年間はHIV感染症が増えています。そして、こういったケースの半数以上は、まさかHIVなんて夢にも思っていなかった…、という症例であり、私はこれを「いきなりHIV」と呼んでいます（「いきなりエイズ」という言葉は有名ですが、これは何らかの症状で医療機関を受診したときにすでにエイズを発症していたという場合です。私が名付けた「いきなりHIV」は、まだエイズを発症していない段階で、諸症状からHIV感染が発覚したというケースです）。

HIVは最近あまり注目されなくなっていますが、患者数が減少しているわけではありません。厚生労働省の発表する数字では、たしかにここ数年は大きな増加はありませんが減少しているわけではありません。「いきなりエイズ」が減少してい



日本における近年のHIV感染者・エイズ患者の発生動向（新規報告数）

厚生労働省のウェブサイトより
<http://www.gov-online.go.jp/useful/article/201305/2.html#anc02>

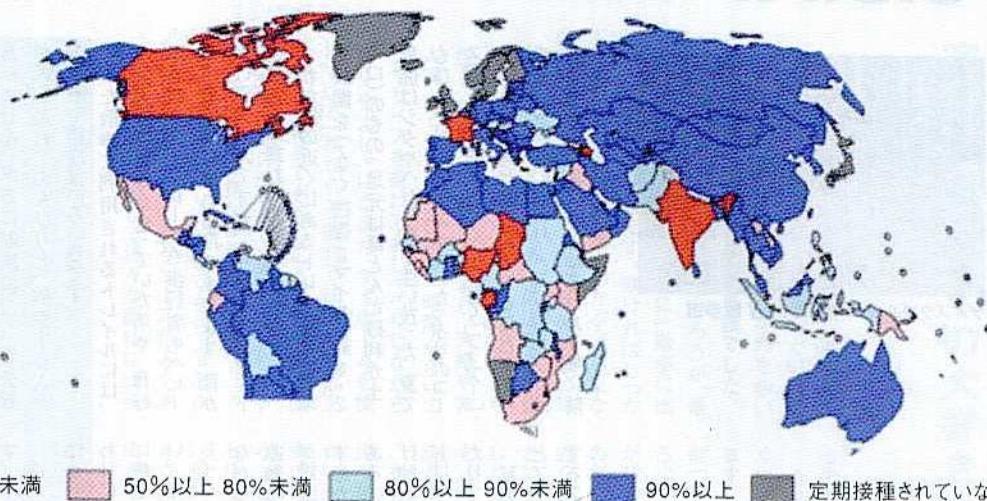
ないことを考えるとおそらく感染に気付いていない人は相当数いるに違いありません。そして、私が特に懸念しているのが海外での感染です。日本のHIVの特徴は男性同性愛者の性的接觸が多数を占める、ということですが、私の印象でいえば、海外で感染するケースでは異性間の感染も少なくありません。

谷口医院はプライマリ・ケアのクリニックでありトラベル・メディスン専門クリニックではありません。しかし繁華街かつオフィス街に位置していることもあり、患者さんの多くは若い人で、出張や観光で海外に渡航するという人からよく相談を受けます。そこでしばしば感じるのが「危機感の乏しさ」です。例えば、常用している薬の英文表記を調べないまま渡航したり（このような場合は主治医に英文診断書を作成してもらうのが最適です）、旅行保険に入ってなったり、チェンマイの奥地をトレッキングする予定なのに蚊対策の知識がなったり、といった感じです。そして最も知識が乏しいと思われるのがHIVを含む性感染症の領域です。

海外旅行をする患者さんに対して通常は「性感染症に気をつけてください」とはこちらからは言いません。しかし、帰国後に性感染症に罹患した患者さんを診ることは少なくなく、社会での性感染症に対する意識が低いことを痛感させられます。先に紹介した例のように海外でのHIV感染が谷口医院で発覚するのは年間数例ですが、梅毒、B型肝炎、性器ヘルペス、

HBVワクチンを新生児に定期接種している国

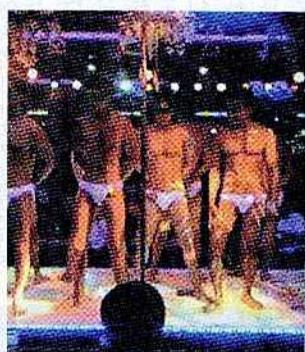
出典:WHO(世界保健機関)
Immunization coverage with
3rd dose of HepB vaccines
in infants, 2009



■ 50%未満 ■ 50%以上 80%未満 ■ 80%以上 90%未満 ■ 90%以上 ■ 定期接種されていない



タイのリゾート地バタヤのオープンバー。このようなバーでは、カウンターの中の現地女性と「恋愛ゲーム」を楽しむ外国人観光客が多い。



バンコクの「ゴーゴーボーイ」の店。いわゆる「ゴーゴーバー」の男性版。若いタイ人男性を自當てに足繁く通う日本人女性も多い。



バタヤにあるタトゥーショップの案内。このような写真を見せられて同意すれば近くの施術場で施術を受ける。感染予防が充分とはとても言えない…。

性器クラミジア感染症など他の性感染症も含めれば、海外で感染し帰国後に発覚する症例は決して少なくないのです。

ひとつひとつの感染症について述べる余裕はありませんが、ここではB型肝炎ウイルス(以下「HBV」)の重要性を指摘しておきたいと思います。HBVは大変感染力の強いウイルスであり、血液・精液・膣分泌液のみならず、唾液・汗・涙などからも感染します。そのため少しじゃれあった程度、あるいはキスだけでも感染することがあります。2002年には佐賀県の保育所で合計25名が集団感染するという事件がありましたし、ワクチンがまだ普及ていなかった時代には格闘技などのコンタクトスポーツでの感染が問題になっていました。HBVはワクチン接種して抗体をつくっておけば感染しませんし、極めて安全なワクチンですから、世界179カ国で(つまりほとんどの国で)、定期の予防接種とされていますが、日本では定期接種に入れられていません。

韓国や台湾などの東アジアや中国・東南アジアでは現在はワクチンが定期接種になっており新生児に対する接種は日本よりも進んでいますが、成人の接種率は決して高くなく住民の1割以上がHBV陽性であるという地域もあると言われています。大企業の駐在員であれば渡航する前に産業医が接種していますし、現地の大学への留学であれば入学の条件としてワクチン接種が義務づけられていることもありますが、一般

の旅行者の場合は他のワクチンと同様無関心であることが目立ちます。

先に紹介した症例は男性でしたが、海外で何らかの性感染症に罹患するのはもちろん女性も同じです。私の印象でいえば、男性よりも女性のほうが「その場限りのアバンチュール」ではなく「ロマンスの始まり」と捉えて現地の異性(ときには同性)と性的接触を持っている人が多いような印象があります。また、HIVやHBVでいえば、性的接触以外に、タトゥー、アートメイク、ボディピアスなどで感染にも注意しなければなりません。私はタイでアートメイクの施術を介してHIVに感染したと思われる日本人女性から相談を受けたことがあります。

新しいパートナーができれば性交渉を持つ前にお互いの性感染症のチェックを、というのが理想ですが、特に海外では「突然やってきた運命の出逢い」もあるでしょう。そのようなくロマンス>に備えてワクチン接種とコンドームの携帯を忘れないように…。

谷口 基(たにぐち・やすし)

大阪市立大学医学部卒。同大学の研修医、海外医療ボランティアなどを経て、大阪市立大学医学部附属病院総合診療センター所属。2006年、HIV/AIDS患者とその家族の支援や広く一般への啓発を目的としたNPO法人GINAを設立。2007年大阪東梅田にプライマリ・ケアのクリニックを開業。日本医師会認定産業医。大阪市立大学医学部非常勤講師も兼任